vol.1

食べて、参って、くつろいで
黒門市場、高津宮、空堀の由来とまちづくり

区南部に位置する黒門市場から、高津宮、空堀を順に紹介。商店街、神社、下町と異なる魅力をもったそれぞれの地区でのまちあるきを楽しんでもよし、少し足を延ばして、2地区、3地区と異なった表情をもつまちの魅力にふれるもよし！

黒門市場（くろもんいちば）

天下の台所と呼ばれた大阪を代表する商店街といえば、黒門市場。大阪の発展を支えてきた歴史とほんまもんの味を追い求め、ますます活気づく取組みは必見！

なぜ「ク・ロ・モ・ン」なのか？

天下の台所大阪を代表する商店街「黒門市場」。その名前の由来について考えたことはありますか。

「クロモン」は、黒い門と書きますが、商店街にも、周辺にも黒い門は見当たりません。「赤門」といえば、東京大学の門が有名でシンボルになっています。実は、ここにもかつて「黒門」が存在したのです。明治終わり頃、大火で焼失し、移転するまでここにあった圓明寺、その門が黒く、その門前に発展したため、この商店街は黒門市場と呼ばれるようになったのです。

まちの発展と商店街の発展

明治の頃、千日前かいわいには刑場がありました。その後、刑場は廃止され、芝居小屋ができ、人が集まりだしました。その頃から見物客を目当てに飲食店が増え、飲食店を支えるために鮮魚店を中心とした食料品店が100件ほども集まりました。それが黒門市場の起源と言われています。（商店街理事長談）

「ほんまもん」で勝負！

黒門市場は店頭での小売りだけでなく、老舗料亭などに食材を卸すことで大阪の食文化を支え、繁盛してきました。しかし、近年の経済情勢の変化で廃業する料亭が増え、商売の転機を迎えています。また、中国製冷凍餃子の事件など、食の安全が脅かされていることも商店街のあり方を考え直すきっかけとなりました。

そこで、掲げられた活性化に向けたキャッチフレーズが「ほんまもん」でした。黒門市場のものは絶対安全にしたいという思い、また、黒門市場の商品なら大丈夫だと、黒門市場のブランドイメージを強化したいという戦略でもあります。

「黒門」「黒門市場」を冠した商品の開発、商標登録など具体的な取組みがどんどん進められています。

商店街の上に掲げられているキャッチフレーズ

耳寄りばなし「黒門市場ポンズ」新発売！

2008年12月、黒門ブランドの商品「黒門市場ポンズ」が、新発売されました。企画は商店街の若手メンバーからの発案だとか。黒門市場では活性化に向けて、若い人の考えを積極的に取り入れようと、熱心に活動しています。

ポンズの発売は新聞にも取り上げられ、人気です。黒門市場の生鮮食品とこのポンズで各家庭でお鍋を味わってみてはいかがでしょう。将来は百貨店にも出荷したいとのこと。大きな夢が発進しました！

巨大なフグやカニ、マグロたちが出現！

活性化に向けた新たなターゲットとして考えられているのが、観光客です。関西国際空港の開港以来、特に食文化の似通ったアジアからの観光客が増えています。

アーケードに吊り下げられた巨大なフグやカニなど全7種類の巨大モニュメント。これらは、2008年3月、もっと元気にそしてお客様を呼び込むシンボルとしてつくられました。観光客にわかりやすく商店街の食材を示そうとの意図もあり、記念写真の被写体として人気ものとなっています。黒門市場での記念写真は観光客が国に帰って知人たちに紹介し、さらに広まることが期待されています。巨大な魚たちは、観光ＰＲに一役かっているのです。

新しい区民の方や観光客にもきてもらいたい

商店街では、近年、マンション建設が盛んで、区内の人口が増えていることから、観光客だけでなく、転入してきた新住民に向けたＰＲも考えています。特に、昔と違い、家庭で料理をしない方が増えていますから、食材だけでなく、すぐに食べることのできる総菜などの中食の販売や試食できる店舗を増やそうと取り組んでいるとのことです。

地域の繁栄こそ、商店街の繁栄！

「地域が繁栄しないと市場も繁栄しない。またその逆もある」と、商店街理事長の西さんは熱く語ります。祭りの時に「シャッター街で神輿を踊らせたくない！」という想いで、まず一つ一つの個店が魅力的になる努力をして、祭りを支援したいと考えているとのことです。「お金を出せるだけの個店の力を付けるためにまず自分のこと、しっかり儲けることをして欲しい。繁栄こそ地域貢献」とも話されていました。商店街は元気をくれる場所ですね。

正面が黒門市場商店街振興組合理事長の西さん

黒門市場のあゆみ

明治35(1902)年	大阪府より公認市場「圓明寺市場」として認可
明治45(1912)年	難波の大火で焼失。焼け跡で青空市を開く
大正中期頃	徐々に黒門市場と称されるように。黒門市場組合設立
昭和20(1945)年	空襲で焼失。住人は疎散先余儀なくされる
昭和23(1948)年	黒門市場組合を再設立。27年、黒門市場振興組合に名称変更
昭和28(1953)年	この頃有名なキャバレー・アルサロの全盛期で恩恵を受ける
昭和35(1960)～40(1965)年	テント式アーケードから鉄骨式アーケードに
昭和59(1984)年	活性化の一環で「黒門夜市」を開催
昭和63(1988)年	組合員、従業員、お得意様向けの広報誌「黒門」創刊
平成9(1997)年	インターネットホームページ開設
平成11(1999)年	イタリア ミラノ ソジェミ市場と姉妹関係を締結
平成16(2004)年	「黒門」を商標登録。翌々年「黒門市場」も
平成20(2008)年	黒門モニュメント(全7種類)完成

（黒門市場商店街振興組合「黒門市場の概要」より）

知って得する！地域情報

■黒門市場ホームページ
http://www.kuromon.com/
イベント情報のほか、話題の黒門市場ポンズをはじめネットショッピングの情報もあります。

■黒門市場土曜とくとくペッパー
毎週土曜日に使うことのできる割引券が一ついっぱいお得な情報誌。チラシは新聞折込の他、市場内にもおかれています。携帯電話からも右のＱＲコードで見ることができます。（お店によって利用できる条件があるので確認下さい）

高津宮（こうづぐう）

昔も今も話題豊富な高津宮。落語にも登場する「黒焼き」についての貴重なお話をはじめ、昔から現在に至る取組みのルーツとねらいは区民必読のネタ。

タカツノミヤ？　コウヅグウ？

高津宮の読みを「タカツノミヤですか？」という方が多いとのこと。時代によっては高津神社（コウヅジンジャ）と呼ばれたこともあり、コウヅジンジャ、コウヅノミヤと呼ばれていたことも。いったい何と呼べばよいのでしょうか。「宗教法人法で登録しているのは「コウヅグウ」です。電話の応対でもそう話しています」とは宮司さんのお話。（右につづく）

創建当時は難波の宮の辺りにあり、今の場所に移った理由は、当時の場所と今の神社がある場所が同じような景色だからだそうです。ちなみに天王寺区東高津町にある東高津宮は、一時期、高津宮が移った場所の一つです。

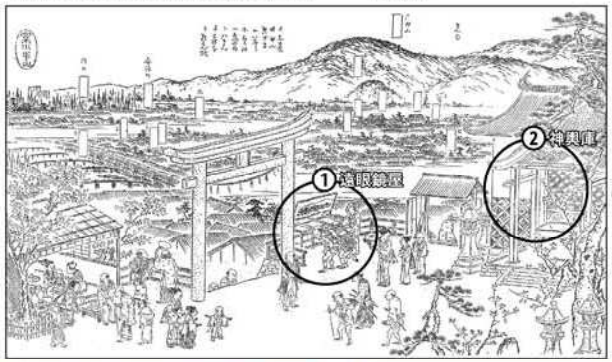
高津宮のあゆみ

貞観8(866)年	難波の宮の辺りで創建
天正11(1583)年	大阪城築城の際、現在地に移る
大正10(1921)年	大阪市歌に「高津宮」が歌われる
昭和20(1945)年	神輿庫のみ焼け残り、社殿ほか焼失
昭和36(1961)年	社殿等復興

（高津宮紹介パンフレットより）

詣でて、観て、食べて―江戸時代の高津宮

江戸時代、庶民の楽しみは寺社仏閣に詣でて、お芝居を見たり、おいしい物を食べたりすることでした。下の絵は当時の高津宮、名物とされていた遠眼鏡屋さんなどが描かれています。



①遠眼鏡屋▼望遠鏡を貸して周辺の景色を見せていました。高津宮は展望の名所であったことから、市内はもちろん六甲の山並みまで見えました。②神輿庫（みこしこ）▼戦災で唯一、焼け残りました。見上げれば水の神「竜」が…（表面積関番号 16）（「摂津名所図会大成」より）

落語と高津宮、詳しくは「高津の富亭（とみてい）」で

「高津の富亭」のきっかけは、平成12年で夏祭りに桂文枝師匠に境内の参集殿で落語を演じていただいたことでした。その5年後、亡くなられる直前にまた落語の機会があり、その演目が「高津の富」だったことから、参集殿を「高津の富亭」と呼ぶようになりました。平成18年には、境内の比売古曽神社の前の場所に桂文枝師匠の碑が建てられ、師匠に縁のあるミナミの方角に向けられています。

ミナミに近く、庶民の楽しみの場として知られていた高津宮は、落語のネタとして登場します。よく知られたものに「高倉狐」「蛸の殻」「いもりの黒焼き」などがあります。

「高倉狐」は、女性に化けて人をだまし、うまい湯豆腐を食べようと目論んだ狐が逆に人間にだまされるという筋で、化けるところを見られてしまったことで、大量に酒を飲まされ、失敗するという筋です。その湯豆腐屋が高津宮のそばのよく知られた名物店という設定です。

高津宮は、「高津の富亭」での落語の他、伝承や文化を現代にアレンジした色々な取組みが行われ、若者からお年寄りまで幅広く楽しむことが出来ます。

耳寄りばなし 名物湯豆腐 復活！

平成20年の秋祭りに、江戸時代に名物だった湯豆腐が復活しました。昔から上町台地には良質の地下水があるとのことで、湯豆腐の味がよく、名物になったと言われています。

秋祭りでは現代風にうどんダシ風味にアレンジし、熱燗とセットで500円で売り出し、即完売！とても好評でした。赤い椀に絹豆腐、あんかけ、鰹節、ねぎしょうがが入っています。

秋祭りに湯豆腐を売りだした時のノボリを持つ宮司さん

高津名物だった「黒焼き」ってご存じ？

江戸時代、湯豆腐とともに高津で有名だったものに、黒焼きがありました。黒焼きとは、下の図のように、イモリなどをいぶした漢方薬のようなものです（薬事法上、現在販売することはできません）。黒焼き屋を営んでいた鳥谷さんにお話を伺いました。

鳥谷さん

気になるのはその作り方。材料は「草、木、動物」など。素焼きの土器で蒸し焼きにします。蛇は健康増進、マムシは強精、虎の骨は神経痛、赤トンボは風邪、ネズミは寝小便、イモリは惚れ薬。有名なイモリの黒焼きは、夫婦仲がよく、焼かれた煙が上部で一つになるとのイモリについての言い伝えから、好きな女性に振りかけたり、お茶に入れて飲ませたりという落語の話で広まりました。

黒焼きの様子を描いた貴重な版ハガキ

さて、もしも今、惚れ薬を手に入れることができたら、あなたは誰に使いますか？

知って得する！地域情報

■高津宮と主なお祭り
http://www.kouzu.or.jp/
中央区高津1-1-29　電話06-6762-1122　／高津宮の年中行事（祭事）のほか、桂文枝一門会によるくろもん寄席、絵の会（写生会）、縁結びパーティなどのイベント情報も掲載されています。

・1月15日-とんど祭り　・2月11日-献梅祭
・7月17～18日-夏祭り　・10月17～18日-秋祭り

空堀（からほり）

商店街を中心に広がるタイムスリップしたような不思議なまち、空堀。歩くだけで十分楽しいけれど、石垣と大阪城との関係などマメ知識を知ることで楽しさ倍増。

めずらしい坂の商店街

空堀商店街は明治時代からできはじめ、大正時代には、延命地蔵の縁日に当たる4の付く日の夜店が有名となりにぎわいました。戦後も、戦災を免れたことで商店が集まり発展をつづけています。

老舗、有名な飲食店、古い建物を活かした若い店主の店舗など、坂に沿って、色々な店舗が軒を連ねています。

ほっとするまちなみが残る空堀

戦国時代、豊臣秀吉が大坂城を守るため、城の南側に築いた外堀が現在の空堀商店街付近にあります。水を入れない空の堀だったことから「空堀」と呼ばれたという説があります。その名残は商店街に沿って見られる石垣が残しています。

空堀は、戦災を免れ焼け残った建物が多く、長屋や路地、石垣にお地蔵さんなどが特徴的な情緒あるまちなみが残っています。

空堀のまちなみを残したい

「つながりを生かすまちなみ」づくりに向けて、空堀まちなみ井戸端会は、市の支援を受け、古いまちなみを保存、再生する活動に取り組んでいます。

最近、再生整備された建物が少しずつ増えています。丸与鰹節店では、改修後、奥にある庭が商店街から見えるようになり、商業施設「惣」では建物の中に路地を再現した通路がつくられています。他にも、空堀の特徴である路地を小さな広場として整備する取組みが進められています。

丸与鰹節店

「惣」にある路地を再現した通路

空堀のあゆみ

戦国時代	豊臣秀吉が大坂城を守るため、城の南側に外堀を築く
大正5(1916)年頃	庶民の楽しみの一つとして地元の延命地蔵の縁日に当たる4の日に夜店が出るようになる(戦前まで続く)
昭和20(1945)年頃	商店街結成。大阪市内で最初に福引き売り出しを始め人気を呼ぶ(現在も7、12月に開催)
昭和25(1950)年	アーケード完成

（参考：おおさか・あんしゅ・ネット）

知って得する！地域情報

■空堀まちなみ保存活動
・「空堀まちなみ井戸端会」ホームページ（活動内容）
http://karahori.hp.infoseek.co.jp/
・「空堀まちなみ井戸端会」-空堀地区HOPEゾーン協議会（概要）
http://www.toshimirai.jp/machidukuri/w7_osaka.html

■空堀かいわいイベント情報
・「空堀商店街・福引き売り出し」-毎年7、12月開催
・「からほりまちアート」-毎年10月頃開催
http://karahori-machi-art.com/

空堀のまちを見るマメ知識

・うだつ

普段何気なく使っていることわざの中には、よくよく考えてみると意味が分からないことってありませんか。例えば「うだつがあがらない」の「うだつ」ってご存じですか？

「うだつがあがらない」の意味は、仕事などで成果が出ず、先の見込みがない状態を言います（語源には諸説あり）が、この「うだつ」とは写真のように建物から張り出した壁のことなんです。空堀ではあちらこちらで見られます。全国的には徳島県の脇町はうだつのまちなみで有名ですよ。

うだつとは、もともと町屋で隣の火事が燃え移るのを防ぐ防火壁として造られたものです。しかし、次第に装飾的な意味に重きが置かれ、自分の財力をアピールするための指標として関西地方を中心に商家の屋根上に互いに競って立派なうだつがつけられました。

・冠木門（かぶきもん）

空堀のまちを歩くと、路地の入口に共同表札や小さな瓦屋根がついてるのを見かけます。この門は冠木門と言われます。正面の横梁材を冠木（かぶき）ということから由来です。

・旧澤井邸

谷町筋から商店街を西に下っていく中程にあります。昔は芝居小屋で、天神橋筋六丁目にある大阪くらしの今昔館には昔の様子が模型で再現されています。建物上部や側面には当時の面影が残っています。

耳寄りばなし 昆布のルーツをたどって…

空堀商店街にある「こんぶ土居」。漫画「美味しんぼ」にも登場した老舗です。店主の土居さんに伺うと「先代からいい昆布をつくるには材料が大切」と、北海道のよい昆布がとれる地区に毎年足を運び、生産者との顔の見える関係づくりに取り組んでいるとのこと。10年前からは、北海道の小学校まで、食育の一環として講演に行かれています。

そのような地道な活動が、平成19年に初めて北海道の現地の高校生が、修学旅行で空堀のお店を訪問することにつながりました。なんと、その修学旅行生は小学校の時、食育の講演を聞いた生徒だったのです。「意外にも北海道の地元の子どもたちは昆布がどのように流通し消費者まで届いているか知らない。昆布のすばらしさを知って、昆布漁にプライドを持って欲しい」と土居さんは話します。

翌年（平成20年）も修学旅行生が訪問。土居さんも2回目ということで工夫を凝らし、「美味しんぼ」作者の雁屋さんも駆けつけ、お得意先の料理人さんが昆布で取ったダシでたこ焼きをつくり、もてなしました。

土居さんは「本物のダシの味を知ってほしい。ダシづくりは難しいというイメージも変えたい」という思いから、定期的に！ダシの取り方教室」を開催しています。

ダシの取り方教室の様子